

# 會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第 卷八十第

行發日一月四年三十正大

故戸田海市博士肖像并に哀詞

論叢

虞夏書に見<sup>は</sup>れたる政治經濟思想 . . . 法學博士 田島 錦治

階級の動的考察 . . . 文學博士 高田 保馬

獨逸最近の社會學論 . . . 文學博士 米田庄太郎

植民地の經濟政策に就きて . . . 法學博士 山本美越乃

時論

不景氣と租稅 . . . 法學博士 神戸 正雄

說苑

一子相續制度に就いて . . . 經濟學士 八木芳之助

客觀的勞賃論の史的發展 . . . 經濟學士 森 耕二郎

雜錄

戸田博士逝く ○戸田海市君の追懷(西山幾太郎) ○戸田博士を憶ひ

て(福田幾三) ○戸田君の追懷(神戸正雄) ○追憶の斷片(河上肇) ○戸田

博士と私(河田嗣郎) ○戸田先生を憶ふ(小島昌太郎) ○戸田博士と大阪

市勞働調査事業(關 二)

## 戸田君の追懷

神戸 正雄

私の戸田君を知るを得たのは明治三十五年、私が京都大學の助教授として赴任してからの事で、同君は私より一年前に就任して居られ、随て私よりも先輩ではあるが、併し私は隔りの少い同僚として同君と交際した所である。其當時は同君も健康であつたから、同君から柔かい話を聞かされたこともあり、淨瑠璃を聞かされたこともある。却々隅には置けない通人だなどの

感知を持て居つた。其れが留學から歸られての後、そして私も少し後れて留學から歸つての後は、既に健康を害されて居たからでもあらうが、同君から聞かざるゝのは唯だ學術上の談論でなければ政治上の意見で、一度同君と落合つたが最後、何時までも引止めて話を續けられた。多分同君は人と話しつゝ自分の考を纏めて往かれたやうで、勿論其間に創作もやられたが、可なり巧に他人の説を取入れて往かれつゝ、あつたやうである。同君に遇ふと、『君あれは何うだらう』で尋ね出さるゝので、實は私も閉口した。否な何とか開口しなければ濟まなかつた。同君の書かれた論文には殆んど引用書を見なかつたが、其は恐らく健康が之を許さなかつたからであらう。併し同君は決して單に書物を讀まずして考へられたのではなく、可なり多くの書物に目を通はした上で、説を立てゝ居らるゝ。私は是迄屢々、我大學圖書館の書物を讀んだときに、此書物はまだ多分何人も讀んでは居るまい、自分こそ此書物の最初の讀手だらうと

の自負心を持つて讀掛けて既に何人かゞ自分よりも前に目を通はした跡のあるのを見付けて、少からず自負心を傷つけられたことがある。そして其が多くの場合に戸田君であることを見出して、健康の勝れざる同君の勉強の程度に感心し、そして其に刺戟せられては健康を保ちたる私として一層の奮勵心を喚起した所である。

同君と最多く接觸する機會を得たのは、商業會議所の調査事業で、特に世界大戰中の經濟的國策につき屢々同君と話合するの機會を得た。此に於て私の同君につき感じたことは、同君の實行的方面に於ける興味の深かつたことである。あの健康状態を以てして態々東京方面まで出掛けて諸方面を歴訪せられ勸説された熱心には敬服の外ない。實は、あの時には二度まで東京に往かれたのであつて、其第一回目には私も同君と一緒に東京の商業會議所に出掛けて行つたが、私には同君だけの熱が足りなかつたから其れで御免を蒙つた。所が同君には二回まで出掛けられ、而かも其第二回目には可なり多くの

方面を誘説せられた所である。善しと信じた事を唯だ説くだけにては足れりませず、飽迄之を實現せしめやうといふ熱心に至ては、到底私なごの及びもつかぬ所である。同君にして健康が良かつたならば、同君は我國の實際政治上にも大なる活動を爲されたであらうと思ふ。

同君が實現しやうとして成功されなかつたのは、東亞經濟研究所の設置である。大正四年、山川總長の時代に同君が首唱して我大學に同研究所を設けやうとして盡力されたが、種々の故障が起つて、折角の好事業が出来上らなかつた。此頃からして同君は大學内の行政に興味を失はれたやうで、其より後、同君の力を傾けられたのは商業會議所を通ほして、君の實際政策上の意見を實際界に用ゐしめやうといふ事業であつた。そして此に於ては相當の成績を示し又、功業を樹てられた所である。そして我が經濟論叢に出た同君の論文は多くは、其事業の副産物に外ならぬ。